

ブック村だより

本学コレクション紹介(5)

『算術、幾何、比と比例大全』初版, 1494年 …………… 高橋 哲雄 (1)

私と図書館 …………… (2)

ぶっくす・なう …………… (4)

『街の灯』 谷岡 一郎

『外為市場血風録』 佐和 良作

『吉野家の牛丼280円革命』 南方 建明

『美女とは何か：日中美人の文化史』 下山 晃

学生の声 …………… 北村 栄治 (6)

粟井 和彦 (6)

2階各コーナーのご案内 …………… (7)

インフォメーション・開館案内 …………… (8)



本学コレクション紹介(5) ルカ・パチョーリ 『算術、幾何、比と比例大全』初版, 1494年

この本は今から509年前にベネチアで出版された数学書だが、世界最初の複式簿記の本としても有名だ。グーテンベルグの印刷術の発明後わずかに39年。最古の活版本の1つで、しかも初版は99冊のみ。希観本きこうほんの中の希観本である。

しかし、本書の素性には重大な疑問がある。著者ルカ・パチョーリが数学を学んだのは同郷の大画家ピエロ・デラ・フランチェスカからだった。有元利夫らに影響を与えたあの甘美なピエロが当

代屈指の数学者であったこと自体が驚きだが、さらに衝撃的なのは1492年のピエロの死後、何とパチョーリが師の業績を自分の名で公刊したとされる点である。糾弾の声を挙げたのは高名なヴァザーリで、ピエロの伝記(1550)中できびしくパチョーリを非難した。ほぼ同時代の同郷人からの告発であるだけに迫力があり、では本書は実はピエロの作なのか、という数学史の書き換えを迫る大問題となる(以下次号)。 (名誉教授・高橋 哲雄)

私と図書館

学生時代の私の読書環境はまったくひどいものだった。大阪大学の北校には独立した図書館は無く、校舎の一部が閉架の書庫で、図書カードで探した書物を借出し、普通の教室の机（閲覧室）で読むほかはなかった。といっても、もともと卓球狂で放課後はほとんど体育館に籠りきり、夕方からは連日家庭教師に精を出していた私のこと、読書量も知れたものだった。当時は教養課程と専門課程がはっきり分かれており、経済学については教養の2年間は「経済学」でサミュエルソン『経済学』の概要と「英書講読」で金融論や経済史をほんの少しかじる程度であった。教科書以外に専門書で読んだ記憶があるのは、2年間でスージャー『社会主義』、先輩の卒論の手助けで一部を翻訳したトーニー『宗教と資本主義の勃興』（R. H. Tawney, Religion and the Rise of Capitalism）で

ある。あとはデュガール『チボー家の人々』、ロマン・ローラン『ジャン・クリストフ』、ゴッキー『幼年時代』、魯迅『阿Q正伝』等もっぱら外国文学の翻訳物や日本の小説、雑誌『世界』などを雑読していた。

専門課程に入っても相も変わらず卓球に入れ込んでいたところ、法学部の高校時代からの親友に「経済学部のお前が俺に経済原論を教えてくださいゅうのはどういうこっちゃ」と説教され、少しは授業に身を入れるようになった。ちょうど安井琢磨・森嶋通夫両先生が成長と循環の理論モデルを競って構築しておられ、きわめて刺激的な授業であった。ケインズ『一般理論』からハロッド『動態経済学』、ジョン・ロビンソン『資本蓄積論』と少し背伸びをしてみたが歯が立たなかった。結局卒論は、J. E. Meade, The Balance of Payments





(ミード『国際収支』)の財政・金融のポリシーミックス論の紹介に終わってしまった。

大学院に進んでも図書館の建物も院生研究室もなく、もっぱら資料室の専門書や雑誌に世話になった。近代経済学の新刊書や必要な雑誌が揃っていた点恵まれていたが、まだ複写機はなく、大事な論文はすぐ読むかあるいは筆写する必要がある、なかなかの労力であった。

研究者になって関西大学、和歌山大学に籍を置き、図書館との縁が続くがそれは貸出を通じてであり、閲覧室を利用することはあまりなかった。ところが後に客員研究員として一年間プリンストン大学に滞在、図書館の地階に畳一畳程度のキャレル(個人閲覧室)が与えられたので、毎日図書館を利用することになった。朝8時から夜12時まで年間ほとんど休館はなく、全館開架式で外来者すべてに開放という便利な図書館で、学生が夜も

沢山集まり、12時の閉館前に食堂が少しにぎわうのには驚いた。各授業でリーディング・アサインメントが多いためとのことであった。狭いキャレルでは息苦しいので、Social Science Room(社会科学資料室)でゆったりした閲覧デスクやソファを使って論文を読む毎日であった。

さて、現在学生諸君の利用できる本学メディアセンターはまさに夢の図書館といえよう。全館開架式ですべての蔵書を自由に手にとって見ることが出来、コピー、貸出も即座に可能。バリエーションに富む閲覧施設とコンピュータの自由な利用、AV設備の完備など、これほど快適な空間を備えている図書館はそう多くないと思われる。新聞や雑誌だけでも結構、「日に一度は図書館」という習慣をつけていただくよう特に新生に期待する。

(図書館長 矢野 恵二)

『街の灯』

(文芸春秋, 2003.1)
北村 薫 著

今流れるような洗練された美しい文章を書くミステリー作家は、北村薫ではないかと思う。彼の新刊『街の灯』は、昭和初期の日本を良家の子女たる「わたし」から見た中編連作ミステリー。マンガで言えば大和和紀の『ハイカラさんが通る』の時代である。不思議な魅力と謎の背景を持った女性お抱え運転手（実はこちらが真の主人公）とともに、日常生活の中の謎を解き明かす。今は失われた日本の風習や考え方がちりばめられ、読んでいるうちにいつの間にか北村ワールドに漂うことだろう。「虚栄の市」、「銀座八丁」、「街の灯」の三つの中編から成り立っているが、特に代表作「街の灯」がいい。読み終わるとチャップリン映画の「街の灯」も観たくなることうけあいである。

北村薫作品のお勧めは、やはり落語家の円紫さんの謎解きを若き大学生の「わたし」がワトソン役で記す「円紫さん」シリーズ。俗に言う安楽椅子探偵モノの一種だが、現代社会の持つ多くの側面がみずみずしい大学生の目を通して語られる。中でも最初の二作『空飛ぶ馬』と『夜の蟬』は絶対お見逃しなきよう。この二作はそもそも、この欄で紹介しようと思っていた矢先に『街の灯』が刊行されたただけのことで、キレアジから言えばこちらが上だと思う。その他の作品も（ついでにアンソロジーも）秀作揃いである。



(学長 谷岡 一郎)

『外為市場血風録』

(集英社, 2003.1)
山口 幸伸 著

タイトルの「外為市場」は、「がいためしじょう」と読む。いうまでもなく、ドルやユーロなどの外国の通貨を取引する市場のことである。

著者の小口氏は、わが国の外為市場において、伝説的な存在になっている名うてのディーラーである。ディーラーたちの使命は円、ドル、ユーロなどの通貨を売買して利益を追求することである。

もちろん、著者として、百戦百勝を続けたわけではない。大成功（大儲け）をしたこともあれば、大失敗（大損）をしたこともある。評者はかつて仕事の関係で小口氏と数時間じっくりと議論をしたことがある。鉄火場のような外為市場で大活躍をしている人とはとても思えない、物静かで、冷静な人物であったと記憶している。

為替レートは常に同じ要因で動いているわけではない。主要な変動要因は、時代とともに貿易収支から資本収支、金利、国際情勢なども考慮した国の競争力へと変わってきている。本書は著者が「ディーラーとしての命」をかけて見続けてきた、ここ20年間あまりの外為市場の変動を明快に、しかも分かりやすく、自身の成功例、失敗例を織り交ぜて淡々と回顧している。

外為市場は、決して専門家だけの世界ではない。海外旅行をするときや、外貨預金をするときのレートは外為市場で決まる。経済を考えていく上で為替レートの動向は不可欠の要因である。外為市場に関する知識を広げるための最適な書である。

(経済学部 教授 佐和 良作)



『吉野家の牛丼280円革命』

(徳間書店, 2002. 9)
榎野 咲男 著

2000年2月のマクドナルド平日半額セールをきっかけに、外食産業では値下げ競争が激化していった。翌年夏、吉野家も牛丼並盛を400円から280円へと大幅な値下げに踏み切る。マクドナルドは2002年8月にハンバーガーを59円まで値下げ、しかし同年決算では29年ぶりの当期赤字に転落した。一方、吉野家は値下げ直後の狂牛病騒動の中でも、7年連続の増収・増益となった。

吉野家は、「安さ」を追求するあまりに、「おいしさ」が犠牲となり、1980年に倒産した企業である。その後、会社更生法の適用を受けて再建、2000年には東証一部に上場するまでに成長した。

本書は、吉野家の安部修仁社長へのインタビューをもとに構成されている。社長は高校卒業後ア

ルバイトから正社員に登用され、トップになった経歴をもつ。倒産から再建までの歩み、「おいしさ」を追及しつつ再び「安さ」に挑戦、「未来の自分に会いに行こう」が合言葉の従業員育成などが丁寧語に語られている。

試行的に値下げした期間限定セールでは、客数激増により食材や容器の配送、店内作業など今までのシステムでは全く対応できず、システムを再構築して本格値下げに踏み切ったこと。10円刻みで価格設定を変えて消費者の反応を調べ280円に決まったことなど。単なる成功物語ではなく、綿密な計画による企業変革のドキュメンタリーとして興味深い。

(総合経営学部 教授 南方 建明)



『美女とは何か：日中美人の文化史』

(晶文社, 2001.10)
張 競 著

「美」や「正義」や「真実」に関して、「とは何か」などと論ずる輩に大した書き手は居ないのは判りきっているが、豈（あに）図らんや、本書には他書に類のない「素材力・比較力」がある。博搜の後の「料理の仕方」が、他の学者とはぜんぜん違う、のである。第1章「好まれた美貌」では「ケツタイやなあ！」と思いつつも大いに納得させられ、第2章「恐れられた美女」でも、「う～ん、なるほど！」と屢々（しばしば）膝を打たされる。3章以下エピソードまで、驚きモノの木の後に両ヒザを打たされることの連続で、読後は脳味噌が妙に不思議なヘンな感触になる。良書には「ショックと蠱惑（こわく）」という麻薬性がつきものであるが、一見野暮なタイトルの本書が

「そもそも、美……」の問いかけに対して教示してくれる回答は、並大抵のモノではない。

西洋人や日中文化にはほとんど馴染みがない人からみれば、日中相互の美人画にはそれほど大きな差異はないと感ぜられるだろうが、本書によれば日本画は生活の瞬間をイキなショットで映し出したものであり、中国画にはもっと抽象的な理想や観念が内蔵されているという。美術ばかりでなく、言語・文学・生活・流行のあらゆる分野で、日本人と中国人の美人像が「すごい！ こんなにも異質なんや！」と本書は思い知らせてくれる。あのコにも読ませたい一冊。

(総合経営学部 助教授 下山 晃)



『新図書館の感想』

経済学部経済学科3年
北村 栄治

私は、新しい図書館ができるのを楽しみにしていました。前の図書館もレポートのための調べ物をする参考書がたくさんありましたが、試験前になると調べ物をする学生で図書館が一杯になることが多かったです。新しい図書館では、参考書も探しやすくなっていて、勉強するための机もかなり多くなっているので混むことがないという利点があります。しかも、設備もかなり充実していて、とても綺麗なのが気に入っています。大学の図書館ではないような気がするほどです。勉強がしやすい環境は大事だと思います。

私は図書館と聞くと古いイメージしか出てこなかったけれど、新しい図書館に通いだしてからそ

の考えが一変しました。図書館との出会いはどんなことからでもいいと思います。映画もブースを使って観ることもできます。本もたくさんあります。どんなものからも様々な勉強ができると思います。授業では教えてもらえないことや、興味を持っていることを伸ばすことができる手取り早い場所が図書館だと思っています。

私の中で、通学している毎日で決めていることがあります。それは一日一日なんでもいいから一つ以上学ぶことです。一日でも無駄に過ごすのはもったいないと感じました。このことをサポートしてくれたのが図書館です。ここに来れば何らかの知識や言語、歴史など様々なことが身につきます。これらは、人生の中で大事な決断をする時や、または、壁にぶち当たったときなど多くの分野で役に立つことだと思うので皆さんにも自分なりの図書館というのを探すのも大学生活の中で大事なことだと思います。図書館は自分のために使うものだと思いました。

『心のオアシス』

総合経営学部 経営学科2年
粟井 和彦

僕にとって図書館は“心のオアシス”的な存在だ。きれいで、静かで、心が満たされる場所を“オアシス”と呼ばずに何と呼ぶのだろうか？

新図書館は、完成して日が浅いので無論きれいだ。しかも、中身（図書）もきれいだ。図書がきれいとはどういうことかということ、新着図書や月刊誌が多く入荷されているということだ。やはり新しい図書はどんどん入れてほしい。まだまだ収容能力に余裕があると本棚の空き具合から感じるので、僕ら学生が図書を借りることが新着図書を増やす方法の1つだと思う。借りることにより学生のニーズがわかり、有益な図書を仕入れること

ができる。無論、リクエストでも同じだが、これだと元から図書館においてある図書を活用できない。せっかく置いてあるのに利用しなければ損だと思う。また、借りることが重要だ。借りるということはじっくり読むということ。じっくり読めば頭に入るので必要と感じた図書は借りるべきだ。別に、リクエストが悪いのではなく、非常に便利なサービスで、僕もよく利用する。自分の家にはDVDプレーヤーが無いので、よくDVDソフトを注文する。DVDブースは最新で席も多くあり利用しやすい。まさか、図書館で今流行のDVDが見れるとは思わなかったので驚いたが、美しい画像を見ていると心にも目にも優しいと思う。

最後になったが、図書館を利用する者はマナーを守らなければならない。やはり図書館は勉学の場なので、マナーを守ることは当然である。マナーある場所でこそオアシスが成り立つのだから……。

2階各コーナーのご案内

昨年9月末にオープンした新図書館では、特に利用の多いと思われる特定の資料を2階部分に別置しています。今回はそれらの紹介をしましょう。

新着コーナー

入館ゲートすぐそばのコーナーです。

整理された新着図書はまずここに配架されます。新しく入荷された図書が、見やすくレイアウトされています。

テーマ図書

時勢にそってセレクトされた図書です。

現在は「ベンチャー関連図書」が置かれています。

文庫・新書コーナー

以下の文庫・新書が置かれています。

岩波新書・中公新書・岩波文庫・丸善ライブラリ・知の再発見双書・平凡社ライブラリ・文春新書・岩波現代文庫・東洋文庫・日経文庫・日経ビジネス人文庫・新潮文庫・PHP新書

指定図書コーナー（禁帯出資料）

授業のカリキュラムに基づき、教員から推薦された図書が教員名順に配架されています。

本学教員著書コーナー（禁帯出資料）

教員の著書が請求記号順に配架されています。

資格コーナー

公認会計士・公務員・税理士・簿記検定など、本学資格講座科目を中心に、資格取得に役立つガイド、テキスト、問題集が科目別に置かれている人気コーナーです。

就職・留学コーナー

面接のノウハウ・会社情報・留学ガイドなど、就職活動・留学に関する資料が置かれています。

旅行コーナー

海外・国内のガイドブックを中心に、旅行に関する資料が置かれています。

新聞コーナー

日経4紙・4大新聞・外国の新聞など約20紙が置かれています。過去1週間分のストックも併せて利用できます。

雑誌コーナー

2100余種の和・洋雑誌が、タイトル順に置かれています。約1年分のバックナンバーも一緒に置かれています。

AVコーナー

ビデオ・DVD・CDなど、約2000タイトルの資料が置かれています。利用される方は、見たい資料のケースと学生証をカウンターに提示して下さい。学生証と交換にヘッドホンをお渡しします。

ブラウジングコーナー

利用者がくつろげるよう、吹き抜けの明るい空間に、ゆったりとしたソファと緑が配置されています。

情報検索コーナー

OPAC（公開検索用端末）6台が設置され、資料の配架場所や入荷・貸出状況がわかるようになっています。貸出資料は予約することもできます。

図書館インフォメーション

◆「図書館分室」オープンについて

4月9日より、図書館分室がオープンしました。

旧図書館の書庫部分に雑誌が保管され、1階南側に図書館分室および雑誌閲覧室が設置されています。こちらで雑誌の所蔵検索・閲覧・製本雑誌の貸出ができます。

開館時間：月～金曜日 9:00～18:00

利用希望者は、1階図書館分室へお越し下さい。

◆卒論作成用の特別貸出について

4年生の皆さんは、卒業論文作成のための特別貸出ができます（通年）。延長手続きを行わずに、1ヶ月借りることができます。

希望者は、貸出時にカウンターまで申し出て、手続きを行って下さい。

◆「テーマ図書」コーナーを設置しました

図書館2階カウンター前に、時勢に沿ったテーマを基に、コーナーを設置しています。テーマは随時選んでいく予定です。ふるってご利用下さい。

◆「Reference」スタッフ募集

学生利用者を対象にした、双方向的な情報誌を発行しました。ご意見・原稿とともに、アイデアスタッフ・編集スタッフを大募集しています。興味のある方は、図書館2F閲覧カウンターまでお気軽に。

開館案内

日	月	火	水	木	金	土
		1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30	31		

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24 31	25	26	27	28	29	30

●は休館日です。

上記以外にも臨時休館日を設ける場合があります。詳細は学内掲示・モニター・ホームページ等でお知らせ致します。

開館時間は平常通り（月～土 9:00～20:00）です。

大阪商業大学図書館報「ブック村だより」第22号 平成15年5月31日 発行 大阪商業大学図書館
〒577-8505 東大阪市御厨栄町4-1-10 電話(06)6781-5280 FAX(06)6781-0089
e-mail: lib@daishodai.ac.jp ホームページアドレス: <http://www.lib.daishodai.ac.jp>

ISSN 1346-8928